

コロナ禍における酒類市場の課題と展望についての研究 －日本酒の流通に着目して－

渡辺 瑠奈

2013年12月、「和食:日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録された。また、2021年に開催された東京2020オリンピックを契機に、日本産ウイスキーや日本古来の伝統酒である日本酒をはじめとした日本産酒類の国際的な評価が高まり、国外へ向けた輸出が拡大している。しかし、国内における酒類市場の状況は少子高齢化や人口減少等の人口動態の変化、高度経済成長後における消費者の低価格志向、ライフスタイルの変化や嗜好の多様化等により全体的な視点で中長期的な縮小が見られている。そのため、近年の日本における酒類市場は、国外からの日本産酒類への関心の高まりとそれに伴う日本産酒類の輸出拡大、国内における酒類消費の減少と酒類市場の規模縮小といった点から着目されていると考えられる。

本研究では、先行研究では明らかにされてこなかった日本酒造りに携わる蔵元杜氏や蔵人の語りに着目し、コロナ禍における日本国内及び、地域の酒類市場の課題と展望について、酒類市場の当事者がどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とした。また、日本酒を取り扱う酒屋や飲食店等にも焦点を当て、日本酒が消費者のもとに届くまでの日本酒の流通の現場における人間的な繋がりについても着目した。

本研究は、2022年9月から12月に渡り、蔵元杜氏や蔵人、酒造組合関係者、酒屋や飲食店の従業員を含む福島県の日本酒市場の関係者を対象に、フィールドワークを通じた半構造化インタビューを実施した。

結果として、コロナ禍における酒類市場では、酒類市場の当事者が酒蔵や酒屋、飲食店といった自身の担う役割と位置付けを認識した上での相互扶助の動きや今後の酒類市場における展望についての語りが見受けられた。

酒類市場において、このような動きや語りが見られたことは、東日本大震災や風評被害との関連が強いと考えられる。酒類市場の当事者が捉える東日本大震災や風評被害は様々であるが、震災を理由にはしたくない、福島県の良さを国内外の人に知ってもらいたいといった思いが共通理念としてあることで、そこに携わる人と人との結びつきを根強くしている。また、このような関係性がコロナ禍という非常事態において、酒類市場の当事者が酒類の生産から流通に至るまでの過程を俯瞰し、気遣い合い、支え合うといった相互扶助の流れに繋がったと考えられるだろう。

(指導教員 照山絢子)